

| | |
|-------|--------------------------------|
| 項 目 名 | ベット柵 4 本使用 |
| 表 題 | 大腿骨頸部骨折が完治せずに退院した方がベットから降りるケース |
| 施 設 名 | 梅本の里（介護老人福祉施設） |

1 利用者の状況

86 歳 女性 要介護度 4 痴呆性老人の日常生活自立度 B

【病名（既往症）及び病状】

アルツハイマー病、左大腿骨頸部骨折（病院から入所、入院時両手拘束、バルーンカテーテル挿入）

2 施設内の生活における現状や課題

【身体的な状況】

●左大腿骨頸部骨折が完治していないため立位不可、オムツ使用、居室内でギャッチアップで食事（医師の指示）移乗不可、食事一部介助

【痴呆の状況】

●昼夜逆転、夜間奇声あり

3 拘束に至った経過や原因と考えられるもの

左大腿骨頸部骨折が完治していないが、痴呆症状に伴い、ベットより降りようとする行為が度々みられ、再度骨折の恐れが大きく、オムツ外し等があるため、拘束に至った病院の流れを受けて、家族の段階的拘束介助の希望があったため。

4 ケアカンファレンスでの意見や協議内容

- 骨折部の治療中のため、サイドレールを使用していなければ骨折部の悪化の恐れが大きいと思われること。
- オムツ交換時に痛みを訴えもあり医師の判断が必要な段階を思われる。
- 夜間の奇声は、短時間から 1 時間のこともあり、度々訪室し、精神の安定を図る。
- 寮母室の近くに居室を用意し、安全確認を行う。

5 拘束廃止に取り組んだ過程や取り組み状況

医師の診断では、骨折部は良くなっているが、全体重をかけることは無理であるとの判断で、移乗は全介助にて車椅子を使用し、食堂にて食事を摂取することによって精神の安定を図る。臥床時はサイドレール 4 本使用。

ベットの足元から降り、這って居室を出てくることが出現したため、オムツを中止し、トイレ誘導に切り替え、2 人介助にて援助を行った。それに伴い、低床ベットを使用し、床には転倒した場合の安全マットを敷き、サードレールを一本使用にする。（起き上がり時に使用）

トイレ誘導を開始することにより、日中ほとんど食堂で過ごし、他の入居者との交流を図る。

6 改善の成果

歩行は不可であるが、ベットより臀部から降りて居室内から出てくる行為が見られ、意思表示ができるまでになる。

日中の活動量が増したために、夜間の奇声がほとんどなくなり、よく休むようになった。

トイレ誘導をすることにより、徐々に尿意、便意の感覚が戻りつつあり、夜間のオムツ外しがなく経過している。

7 担当職員の感想、意見

骨折から治癒していく状態を把握しながらの事例であったため、職員も本人の降りたい意思を声かけや他のことで転換していく必要があったために、完治するまでには 2 人介助

や見守りでぎりぎりまで援助。

本人の気持ち（起こして欲しい）と骨の癒合がうまくいかなかったらという職員の葛藤もあったが、医師の判断指示の下、経過とともに 離床 トイレ誘導 低床ベットに変更した。

今では、表情も明るく、よくしゃべるようになり、レクリエーションでは歌を歌うほどに順調に回復し、家族も表情が明るくなったことを喜ばれる。

今後は、医師、理学療法士と相談し、筋力増強訓練等を行い、歩行器使用の自立歩行ができる援助を行っていく。